

大学体育におけるニュースポーツ選択者の特性

久保和之*, 道用 亘**, 吉澤洋二***, 守能信次****

The Characteristics of Students Selecting New sports in College PE Class

Kazuyuki KUBO, Wataru DOYO, Youji YOSHIZAWA and Shinji MORINO

Abstract

Flying disks have many characteristics as a subject in physical education classes. For example, it is easy to control the stamina level, the number of players, and the skill level. The disks have unique flight characteristics. There is extremely little physical contact, so it is not a dangerous sport. It is easy to prepare to play, and the equipment is cheap.

The purpose of this study was to clarify the characteristics of students selecting a newsport, and to examine the effectiveness of newsports as a subject in college physical education classes. We conducted a written questionnaire survey of college students. Of them, the number playing newsports was 187, volleyball 179, tennis 85, and baseball 85. The questionnaire included questions on likes and dislikes in PE, likes and dislikes in sport, past sports activity, stamina level, degree of health, the reason for selecting a sport, sports plan, class evaluation, a quantity of exercise.

It became clear that the students who selected newsports had the most negative attitude and opinion of exercise and sports. The students who selected tennis showed a similar tendency, differing from the students who selected baseball or volleyball.

The students who selected newsports were satisfied with the contents and the exercise quantity of newsports class. They changed their plan for later participation in sports. At the end of newsports class, the number of persons planning to participate in a sport in the future had increased.

1. 緒言

昨今の大学における学部改組やカリキュラム変更などにより、いわゆる「体育」が大学の必修科目からはずれる傾向があることは周知の事実であり、その要因としてこれまでの授業の成果や授業目的があいまいであったことなどがあげられる。このことは実際に授業を受講する学

生にとってみれば大学生活における数少ない身体活動を行う機会の喪失であることは間違いないことである。SSF 笹川スポーツ財団の1996年のデータによると、成人で過去1年間に運動・スポーツ活動を実施したのは65.9%であり、週2回以上、ややきつい運動を30分以上行っているアクティブなスポーツ人口になると9.1%であると報告されており、年代別でみると大学生

*大学院生, **名古屋大学大学院生, ***名古屋経済大学, ****教授

を含む20歳代は14.7%となっている。しかし、この調査対象が成人であることを考慮すれば大学生の値はもう少し多く見込まれるが、それでも3割前後ではないかと推察される。また、年々、子どもの体力の低下が進んでいることは文部省などのデータによって報告されているとおりである。健康及び体力維持には適度な運動が重要な役割を果たすことから、運動・スポーツ活動実施者の少ない現状では、現在の生徒や学生が高齢になったときの健康管理が非常に危ぶまれる。高齢期にウォーキングや水泳、ゲートボールなどの身体活動を開始する人もみられるが、高齢者の運動やスポーツ活動は若い時期の経験や活動と関連しており、若い時期に活動を行っていた人は高齢になっても積極的に活動を行っていることが報告されている³⁾¹²⁾。実際には定期的な活動実施者が少ないのが現状であり、この点に関して社会化の観点からみると各種学校在学時に体育の授業を受けた者は運動・スポーツについて認知するけれども、実際に行動するまでには至っていないという準社会化¹¹⁾の状態にあると考えられる。また、以前活動を行っていた者や運動・スポーツを実施している者は特に機会を作らなくても自ら活動することができるのに対して、運動・スポーツあるいは体育嫌いの者は自ら進んで活動を行わない。多様な属性を持った個人が所属する社会において様々な人物との相互作用を通して役割を習得していくという社会学習説の考え方からすると、問題となる運動・スポーツ・体育嫌いの者は個人的特性として「運動能力が低い」「運動神経が鈍い」「運動が苦手であるという自己認識を持っている」といった要因を持ち、重要な他者として「運動ができないことに厳しい体育教師」「運動をしない両親」「塾や習い事に行く友達」などの影響を受け、社会的状況として「公園やグラウンドといった運動を行う場所がない」「一緒に遊ぶ子どもが少ない」「テレビゲームの発達」といった環境要因によってスポーツへ社会化されていないと考えられる。言い換えると、彼らは「反社会化（アンチソシアリゼーション）」されていると捉えられる。野々宮¹³⁾によればニュー

スポーツ¹²⁾は「競技スポーツに対するアンチテーゼとして、また、競技スポーツが人や環境などを様々な点で排除せざるをえなかったものを、補うもの」と位置づけられており、従来の競技スポーツや学校体育では行動レベルまでスポーツへ社会化されなかった者を運動やスポーツへ向かわせる可能性があることを示唆している。また、ニュースポーツを市民体育祭で行ったところ、参加者が増加したという報告もあり¹⁸⁾、ニュースポーツのニーズは各方面で出てきている。学校体育の場面ではニュースポーツの一つであるフライングディスクの授業を行うことによって従来の学校体育でスポーツ嫌いになった学生の意識改革に著しい効果が見られたことが報告¹⁰⁾されているように大学体育においてもニュースポーツが取り入れられるようになってきている。大学体育におけるニュースポーツについて取り扱った研究は師岡、手塚、村瀬らが行っており、教材を紹介するとともに体育嫌いの学生が新しいスポーツ観を持ち「できること」への自信を深めており、大学体育の教材として適していることを報告している^{9) 11) 17)}。また、フライングディスクは体育実技の教材として①体力に応じて楽しめる②人数に応じて楽しめる③技術の応用が利く④独特の飛行特性がある⑤身体接触の禁止⑥全身運動である⑦負傷する危険性が低い⑧準備が簡単⑨用具が安価といった特徴を持っていることが報告されている（師岡1991）。しかし、これまでの先行研究の多くがニュースポーツの種目紹介と導入方法の検討にとどまっている。多くの教育現場でニュースポーツが取り入れられるようになってきているが、その理由が漠然としていることから体育関連授業におけるニュースポーツの効果や有効性を示す必要があると考え、本研究に着手した。

本研究ではニュースポーツを選択する学生と他種目選択者との比較を通してニュースポーツ選択者の特性を明らかにし、大学体育におけるニュースポーツの意義について検討することを目的とした。

表1 ニュースポーツの授業計画

1	フィットネススポーツオリエンテーション
2	体力測定
3	フライングディスクの紹介、バックハンドスロー
4	サイドアームスロー、カーブスロー
5	ガッツ
6	ユニホック、アップサイドダウンスロー
7	ロングスロー、ローリング、ディスクゴルフ①
8	アルティメット①ルール説明、パスアンドラン
9	アルティメット②ミニゲーム、オーバーハンドスロー
10	インディアカ、ソフトバレーボール
11	アルティメット③ゲーム、サムフリップスロー
12	アルティメット④ゲーム、MTA、エアバウンス
13	ディスクゴルフ②、ディスタンス、まとめ

注:ユニホック、インディアカ、ソフトバレー以外はフライングディスク

2. 方法

ニュースポーツ受講者の特性を明らかにするためにN大学フィットネススポーツ1を受講する学生に対し、質問紙調査を行った。授業はベースボール、テニス、バレーボール、ニュースポーツの4種目を設定しており、1年次開講の必修科目である。講義は半期で終了し、授業数は14回前後となっている。調査は1998年度前期の第3回目(実技初日)と第13回目(実技最終日)の授業時に質問紙を用いて実施した。回収数はニュースポーツ187部、バレーボール179部、テニス85部、ベースボール85部であり、そのうち女子学生を除いた446部を分析対象とした^(注3)。調査内容は体育の好き嫌い、過去のスポーツ活動(部活)、スポーツの好き嫌い、体力レベル、健康度、種目選択理由、今後の活動

予定、授業評価、運動量である。N大学では1993年度からニュースポーツを採用しフライングディスクを中心にインディアカ、ペタンク、ユニホック、アヒルホッケー、チュックボール、ソフトバレーボールなどを行っている。

3. 結果及び考察

(1) 高校までの体育好き

小学校、中学校、高校時代における体育の好きな程度について選択種目別にクロス集計をした結果、選択種目によって好きだった程度が異なっており、それぞれ0.1%水準で有意な差が見られた(表2参照)。小学校時代の体育好きではニュースポーツ選択者は「非常に好きだった」25.8%、「好きだった」33.5%、「どちらでもない」23.9%、「あまり好きではなかった」11%、「好きではなかった」5.8%となっているが、バレーボール選択者及びベースボール選択者では「非常に好き」と「好き」を合わせて8割を越えており、好きではなかったという否定的な回答をしたものはそれぞれ7.5%、2.4%であった。テニス選択者はニュースポーツと同様の傾向を示したが、ニュースポーツより「好きだった」という肯定的な回答が多く、「好きではなかった」という否定的な回答が少なかった。中学校及び高校時代の体育好きにおいても小学校時と同様の差が見られ、大学でニュースポーツを選択する学生の約4割は過去の体育授業について良い印象を持っていないことが明らかになった。

表2 体育好きの程度

		(%)					Chi-Square	P
		非常に好きだった	好きだった	どちらでもなかった	あまり好きではなかった	好きではなかった		
小学校時代	ニュースポーツ	25.8	33.5	23.9	11	5.8	58.4	0.001
	テニス	30	32.9	25.7	2.9	8.6		
	バレーボール	51.7	31.3	9.5	6.1	1.4		
	ベースボール	60	21.2	16.5	-	2.4		
中学校時代	ニュースポーツ	14.8	43.9	26.5	11	3.9	70.9	0.001
	テニス	22.9	38.6	24.3	8.6	5.7		
	バレーボール	50.7	36.8	7.4	4.4	0.7		
	ベースボール	50.6	28.2	17.6	1.2	2.4		
高校時代	ニュースポーツ	20	38.7	27.1	8.4	5.8	47.4	0.001
	テニス	24.3	32.9	31.4	7.1	4.3		
	バレーボール	44.9	33.8	13.2	4.4	3.7		
	ベースボール	55.3	27.1	11.8	4.7	1.2		

サンプル数:ニュースポーツ155、テニス70、バレーボール136、ベースボール85

表3 過去のクラブ活動

	(%)			
	ニュースポーツ n = 155	テニス n = 70	バレーボール n = 136	ベースボール n = 85
行っていた	85.8	87.1	94.1	92.9
行っていない	14.2	12.9	5.9	7.1

n.s.

(2) 部活動経験

大学に入学するまでに体育以外のスポーツ活動(クラブ活動)を行っていたかについてまとめたのが表3である。これによれば、高校までにクラブ活動を「行っていた」と回答した者が全体の89.5%であった。全体の約9割の者が「行っていた」と回答しているのは、小学校から高校までのすべての時代でクラブ活動の性質を問わずに質問したために小学校や中学校での正課活動も含まれていると考えられる。したがって、課外活動の運動部をみた場合はどのスポーツを選択した学生でも活動経験がより少ないことが予想される。このことについてはどの種目を選択した学生も同じ条件であると考え、分析を進めた。種目別ではニュースポーツ選択者85.8%、テニス選択者87.1%、バレーボール選択者94.1%、ベースボール選択者92.9%と

表4 スポーツをすることが好き

	(%)			
	ニュースポーツ	テニス	バレーボール	ベースボール
はい	63.2	61.4	86.8	88.2
どちらでもない	31	30	11	8.2
いいえ	5.8	8.6	2.2	3.5

Chi-square = 37.4 p < .001

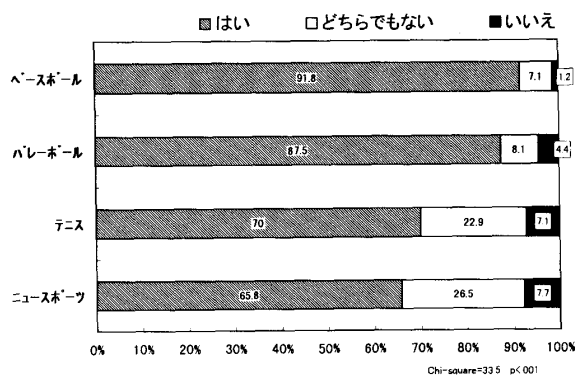


図1 スポーツ好き(見ること)

なっており、正課活動を含めたと考えたとしてもニュースポーツを選択する学生が一番少ない結果であった。

(3) スポーツ好き

スポーツ好きかそうでないかを「すること」と「見ること」についてまとめたのが表4及び図1である。まず、スポーツをすることが好きと回答したのは全体の74.9%であった。選択した種目別でみると0.1%水準で有意差がみられ、ニュースポーツ選択者及びテニス選択者はバレーボール・ベースボール選択者に比べてスポーツをすることが好きな者の割合が少なく、どちらでもない者の割合が多いことが明らかとなった。反対に「いいえ」と回答した者の割合はテニスおよびニュースポーツ選択者が多くなっていた。

スポーツを見ることについてもすることと同様の傾向が見られ、ニュースポーツ及びテニス選択者はバレーボール及びベースボール選択者に比べて見ることを好きな者の割合が少なく、どちらでもないとする者が多い上に「いいえ」と回答する者が多い。スポーツを見ることに関してはニュースポーツ選択者が最も消極的であった。

(4) 体力レベル

学生の体力レベルについて「非常に優れている」から「非常に劣っている」の5段階尺度で自己評価させたところ、表5に示すような割合になった。全体的に見れば「普通」と回答した者が最も多く約半数を占めており、次いで「劣っている」が多い結果であった。選択種目別で見ると、0.1%水準で有意な差が認められた。ニュースポーツ選択者の体力レベルをみると

表5 体力レベルの自己評価

	(%)			
	ニュースポーツ	テニス	バレーボール	ベースボール
非常に優れている	0.6	4.3	5.9	14.1
優れている	4.5	12.9	21.3	15.3
普通	54.2	48.6	54.4	50.6
劣っている	29.7	24.3	15.4	14.1
非常に劣っている	11	10	2.9	5.9

Chi-square = 58.4 p < .001

表6 相対的体力レベル

	(%)			
	ニュースポーツ n = 69	テニス n = 78	バレーボール n = 81	ベースボール n = 81
A (高い)	4.3	5.1	2.5	9.9
B	10.1	11.5	17.3	18.5
C (普通)	31.9	29.5	42	34.6
D	36.2	29.5	27.2	27.2
E (低い)	17.4	24.4	11.1	9.9

注:A ~ Eの区分は注4参照 Chi-square = 52.1 p < .001

「非常に優れている」0.6%、「優れている」4.5%であるが他の種目では「非常に優れている」と「優れている」を合わせて17~29%を占めており、ニュースポーツを選択する学生には体力レベルが優れていると思っている者が少ないことが明らかになった。反対に体力レベルが劣っているとする者の割合を見てもニュースポーツ選択者が最も多くなっている。

また、各学生が行った体力測定を基に算出した相対的体力レベル^{注4)}をまとめたのが表6である。これを見てもニュースポーツ選択者には他種目選択者に比べて体力レベルが低い者が多く、高い者が少ない。

(5) 健康度

学生の健康度についての自己評価を5段階で測定し、まとめたのが表7である。体力レベルと同様に「普通である」と回答した者が最も多く約半数を占めているが、「非常に優れている」「優れている」と回答した者の割合は体力レベルに比べて約3割程度多くなっている。選択種目別では有意な差が見られ、ベースボールを選択する者は他種目を選択する者に比べて健康であると感じている者が多く6割強を占めていた。ニュースポーツ選択者は体力レベルの優れてい

表7 健康度

	(%)			
	ニュースポーツ	テニス	バレーボール	ベースボール
非常に優れている	13.5	11.4	9.6	29.4
優れている	21.9	27.1	30.1	36.5
普通	47.1	44.3	40.4	22.4
劣っている	16.1	12.9	16.2	8.2
非常に劣っている	1.3	4.3	3.7	3.5

Chi-square = 33.8 p < .001

表8 運動量

	(%)	
	ニュースポーツ	バレーボール
多い	4.6	3.9
やや多い	37.1	31.5
適度	19.2	18.9
やや少ない	32.5	40.2
少ない	6.6	5.5

n.s.

る者が少ないにも関わらず健康度については優れていると回答している者が多く見られた。

(6) 運動量

授業中の運動量についてニュースポーツ選択者とバレーボール選択者に「多い」から「少ない」の5段階で聞いたところ表8の様な結果になった。授業中の運動量が「適度である」と回答した者は両種目とも約2割であり、「やや多い」及び「やや少ない」とした者は約3割から約4割、「多い」もしくは「少ない」とした者は両種目とも5%前後であった。このことは学生の体力レベルと関連していると思われ、体力レベルの高い者から低い者が含まれる両種目では同じ活動を行っても運動量が多いと感じる者から少ないと感じる者までがいることは当然であろう。しかし、適度やどちらかといえば少ないと回答している者が約6割を占めており、両種目とも授業として適度な運動量を確保していると考えられる。

(7) 授業評価

ニュースポーツの授業評価について示したのが図2である。これによると「満足」と回答した者が34.7%、「やや満足」58.5%、「やや不満」6.1%、「不満」0.7%

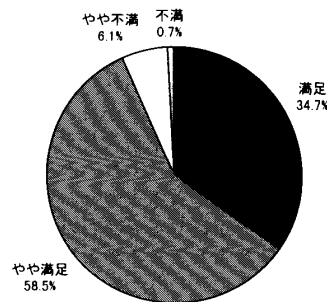


図2 ニュースポーツの授業評価

表9 今後の運動・スポーツ実施予定

	(%)			
	ニュースポーツ	テニス	バレーボール	ベースボール
行う	21.3	27.1	46.3	57.6
機会があれば行う	52.7	48.2	38.8	32.9
わからない	23.1	21.2	15	8.2
行わない	3	3.5	0	1.2

Chi-square = 45.8 p < .001

表10 今後の予定の推移(ニュースポーツ選択者)

	(%)	
	第1回目	最終回
行う	21.3	30.8
機会があれば行う	52.7	52.8
わからない	23.1	13.8
行わない	3	2.5

6.1%、「不満」0.7%であった。このことは授業の指導内容と関連しており、指導する技術レベルを各学生に合わせて設定し、全体的にあまり激しい運動を行わなかったことから体育に否定的な印象を持った学生も授業内容に満足しているのではないかと推測される。一方、授業後のコメントとして「もっと汗をかきたい」「もっとハードにするべきだ」という意見があり、体力レベルの高い学生にとっては授業中の運動量が少ないようであった。

(8) 今後の運動・スポーツ実施予定

今後の運動・スポーツ実施予定について「行う」「機会があれば行う」「わからない」「行わない」という4つの選択肢で聞いたところ、表

9に示すような結果になった。選択種目別で有意な差が見られ、ニュースポーツ選択者では他種目選択者に比べて「行う」と回答した者の割合が少ない。しかし、「行わない」と回答している者は僅か3%であり、約半数の者が「機会があれば行う」としており、運動・スポーツを行う機会を設定することによって今後の活動実施が見込まれる。また、ニュースポーツ選択者における今後の活動予定の推移をまとめたのが表10である。これによれば第1回目の調査時よりも授業の最終回に聞いた答えの方が「行う」という回答が多く、「わからない」という回答が少なくなっていた。よって体育によい印象を持っていない学生でもニュースポーツを指導することによって運動・スポーツに対する態度が変わることが示唆された。

(9) 選択理由

各種目選択者の選択理由についてまとめたのが表11である。これによるとニュースポーツ選択者は「やったことがない」「新しいことをやってみたい」という類の回答が多く見られ、「やっていたから」「好きだから」という回答は全く見られなかった。その他の種目では「やっていたから」「好きだから」という選択理由が多く、既存のスポーツとして高校時代までに経験があることが窺える。また、「他のスポーツは下手(苦手)だから」という回答はニュースポーツ選択者で多く見られ、他の種目選択者では少なかった。

表11 種目選択の自由

	(複数回答) (%)			
	ニュースポーツ n = 189	テニス n = 85	バレーボール n = 179	ベースボール n = 85
やっていたから	0	14.1	11.2	21.2
好きだから	0	3.5	8.9	35.3
今までにやったことがない	35.3	8.2	0	3.5
新しいこと(スポーツ)をやってみたかった	15	0	0	0
他の種目が嫌だったから	6.4	5.9	3.4	5.9
他のスポーツは下手(苦手)だから	5.3	1.2	1.1	0
球技があまり得意でないから	1.6	0	0	0
他の種目はできそうもないから	0.5	0	0	0
運動能力が低くても楽しめそうだから	0.5	0	0	0
他の種目よりできるから	0	0	1.7	0
素人でもできそうだから	0	0	0.6	0
できそうだから	0	1.2	1.1	2.4

表12 選択理由及び今後の予定（ニュースポーツ選択者）

(%)

選 択 理 由	運動量	授業内容	今後の予定1	今後の予定2
今まで行ったことのない新しいスポーツができると思ったから	適度	満足	わからない	機会があれば
球技種目はあまり好きではない、今までにやったことがないから、バレーボールやテニスはできそうもないから	やや多い	やや満足	わからない	機会があれば
これまでにない新しいことをやれそうだったから	適度	やや満足	わからない	行う
初めての種目ばかりだから挑戦する気持ちで選択した	やや多い	やや満足	行う	行う
初めてのスポーツだったので興味があったから	多い	満足	わからない	行う
おもしろそうだった	やや多い	やや満足	わからない	わからない
高校までの体育とは違ったことができそうだから、やったことがなかったから	やや多い	やや満足	機会があれば	行う
限定されたスポーツでなかったから、いろいろな種目ができて楽しそうだったから	適度	やや満足	機会があれば	機会があれば
一度もしたことのない種目だったから	少ない	やや満足	機会があれば	行う
球技があまり得意でないから	やや多い	やや満足	行う	行う
今までやったことのない種目をやってみたかったから	やや少ない	やや不満	機会があれば	機会があれば
選択種目の中で一番面白そうだったから	適度	満足	わからない	わからない
なんとなく、バレーとテニスはあまり好きじゃないから、珍しいもの好きだから	N.A.	N.A.	機会があれば	
今までやったことのない種目がいろいろやれると聞いて楽しそうだった、バレーとテニスは高校でやったけどニュースポーツはやったことがないから	N.A.	N.A.	行う	N.A.
バレーとテニスは高校時代にやっているの新しいことに挑戦してみようと思った	やや少ない	満足	わからない	行わない
やってみたくと思ったから	適度	満足	行わない	機会があれば
新しい物好きだから	やや多い	やや満足	機会があれば	機会があれば
今までやったことのないスポーツばかりで楽しそうだったので	適度	やや満足	機会があれば	機会があれば
おもしろそうだった、人数調整で移った	やや多い	やや満足	機会があれば	機会があれば
簡単そうだったから	多い	やや満足	わからない	行わない
面白そうだったから	N.A.	N.A.	行わない	N.A.
今までやったことがなかったから、面白そうだったから	やや少ない	やや満足	わからない	わからない
今までやったことがないスポーツだったから	適度	やや満足	行わない	わからない
いまさら、野球やバレーなどやる気になれなかったから	やや多い	満足	行う	行う
いろんな種目ができて自分にあったものが見つけられそうだったから	やや多い	やや満足	わからない	行う
おもしろそうだったから				

注：高校時の体育が「あまり好きではなかった」、「好きではなかった」人のみ抽出。今後の予定1は第1回の実技実施前、今後の予定2は最終回の実施後に測定。

表12に示したのはニュースポーツ選択者のうち、高校時代の体育について「好きではなかった」及び「あまり好きではなかった」と回答した者の種目選択理由、授業の運動量、授業内容評価、今後の運動・スポーツ活動実施予定をまとめたものである。まず、選択理由についてであるが、体育好きでない者の半数以上が「今までやったことがない」「新しい」という理由を挙げており、高校までの体育とは異なる内容を求めているようである。運動量について「多い」「やや多い」とした者は11名、「適度」が7名、「やや少ない」「少ない」が5名であり、どちらかという運動量が多いと感じているようであるが、少ないと感じる者もいることが判明した。また、授業評価では1名を除いて「満足」「やや満足」と回答しており、ニュースポーツを行うことによって彼らでも満足のいく授業ができるようである。今後の運動・スポーツ活動実施

予定についてニュースポーツ授業の初回と最終回に聞いたところ、初回には「わからない」という消極的な回答が多かったが、最終回には「行う」といった積極的な回答が増加していた。

4. まとめ

以上の結果から各種目の選択者の特性をみると、ニュースポーツ選択者が運動・スポーツに対して最も消極的な態度や考えを持っていることが明らかになった。また、テニス選択者もニュースポーツ選択者と同様の傾向を示し、バレーボールやベースボールを選択する者とは異なっていた。ニュースポーツ及びテニス選択者を種目選択理由（表11）から考察すると運動・スポーツに対して消極的な者のうち、新しい物好き、何かにチャレンジしたいと考えたり既存のスポーツを敬遠する者がニュースポーツを選

択しているのではないかと考えられる。しかし、今回の調査ではニューススポーツ選択者とテニス選択者がなぜ、同じ様な特性を持っているのか明らかにすることができず、さらに深い分析や考察が必要である。また、今回の調査では健康度や運動量については学生の主観で回答しているため、授業時の歩数や脈拍、体脂肪率等を測定し、客観的なデータを得ることが課題である。

N大学で開講されていたのが、今回調査した4種目であったことから、ニューススポーツの代わりにゴルフを開講した場合には、学生にとっては高校までの体育とは違う種目であり、新しい種目になるわけであるが、ゴルフがいわゆる既存の競技スポーツとして捉えられることから果たして運動・スポーツ・体育嫌いの学生が選択種目をどのように捉えるかは不明である。ただ、言えることは「ニューススポーツ」と呼ぶことで、何か新しいことを行い、競技スポーツではなく遊びやゲームの感覚で身体活動ができるというニュアンスを持たせることができるのではないだろうか。もちろん、選択する前のガイダンスや講義内容の紹介での説明の仕方にも関連する問題でもあろう。

加えて、今回の結果からみるとニューススポーツ選択者のうち運動・スポーツ或いは体育嫌いの学生でも授業に満足し、今後の活動予定が望ましい方向に変化している。それらの学生も情緒レベルにおいてスポーツへ社会化されていることから、あとは環境を整えて実際に活動を行うという行動レベルを上げること、すなわち継続して身体活動を行うことが大切なことである。もちろん、ニューススポーツ以外の種目を選択した者も授業に満足し、今後の予定で活動を行うと回答しているが、それらの種目選択者には運動・スポーツ或いは体育好きな学生が多いことを考えれば当然の結果であり、体育に好意を持っていない者の満足度や今後の予定が重視されるべきであろう。高校までの体育によい印象を持っていない学生が存在する限り大学体育においてニューススポーツ科目を実施することは有意義であり、スポーツの選択肢を広げる上でも開講することが望まれる。いずれにせよニュー

スポーツに限らず大学における体育の授業は楽しんで身体活動を行うというコンセプトの再確認する場ではないだろうか。

付記

本研究は東海体育学会第46回大会(朝日大学)において発表した内容に加筆・修正を加えたものである。なお、データを収集するにあたり、同志社大学の石倉忠夫氏の協力を頂いた。ここに記して感謝の意を表します。

注1：社会学の分野に於いて個人の関連する社会の一員になることを社会化と捉えており、人々はスポーツの分野にも社会化すると考えられる。これまでのスポーツへの社会化研究によれば、我が国では学校教育において体育の授業を受けた者は全員がスポーツの価値や規範等を獲得してスポーツへ社会化されると考えられているが、実際に運動・スポーツを実施している者が少ないことから全ての者が完全にスポーツへ社会化していないと考えられる。社会化の側面には認知レベルと行動レベルがあり、その両方を合わせて考えることが妥当であり、健康と深く関わりあいのある行動レベルを問題にするべきであろう。

注2：ニューススポーツには「輸入型」「改良型」「開発型」があり、それらの多くはいつでも・誰でも・どこでも行うことができるという特徴があげられる。ニューススポーツの定義については様々な意見が出されており、混沌としているのが現状である。本研究では、①国内外を問わず最近生まれたスポーツ、②諸外国で古くから行われていたが、最近我が国で普及したスポーツ、③既存のスポーツ・成熟したスポーツのルール等を簡略化したスポーツ、を包含したものをニューススポーツとした(通産省:「スポーツビジョン21」より)。ニューススポーツに関する文献はニューススポーツが紹介されている本やニューススポーツ事典、ニューススポーツ百科などが数点見られ、それらに掲載されている種目をニューススポーツと呼んで差し障りがないであろう。また、様々な運動

や健康・スポーツに関連する雑誌に於いて種目紹介として掲載されているものが多数存在し、その中の一つ「みんなのスポーツ」ではニュースポーツにおける傷害・事故や安全対策などのデータが報告されている。また、第6回スポーツ史学会において「ニュースポーツとは何か」というシンポジウムが行われ、その報告書が1993年に出されている。その他、1995年の体育科教育1月号に於いてニュースポーツの特集が生まれ、学校体育との関連や授業における展開例などが紹介されている。ニュースポーツの一つであるフライングディスクはワールドゲームズの正式種目に採用されるなど、スポーツとして認知されてきており、現在では120を越える大学でフライングディスクの活動が行われており、一部の中学校、高等学校、専門学校でも行われている。

注3：N大学には法学部と経済学部があり、1学年450人前後（法学部250人）である。男女の割合はおおよそ9：1であり、男女別で分析を行ったところ、ほとんどの変数で有意な差が認められたために女子学生は分析から除外した。対象人数が示されていない表があるが、その場合は表2と同じサンプル数である。

注4：N大学では学生の体力測定を毎年継続して行っており、その蓄積されたデータを基にAからEの5段階を設定している。体力測定は腹筋力、背筋力、握力、肺活量、反復横飛び、立ち幅跳び、上体そらし、前屈を行い、それらの結果を数値化して体力レベルの判定を行っている。

参考文献

- 1) Caporali, John M., (1988), THE ULTIMATE ALTERNATIVE-A Curriculum for Teaching Ultimate-, JOPERD September, pp 98-101.
- 2) 江橋慎四郎、池田勝 編, (1990), レクリエーションハンドブック, (株)国土社.
- 3) 原田宗彦、長積仁, (1990), 高齢者のスポーツ参加に関する縦断的研究, Leisure & recreation 第7号, pp 2-9.
- 4) 健康・体力づくり事業財団, (1994), ニュースポーツ ルールと技術, 健康・体力づくり事業財団.
- 5) 北川勇人, (1991), ニュースポーツ事典, (株)遊技社.
- 6) みんなのスポーツ編集部, (1998), ニュースポーツの身体負担度と安全対策, みんなのスポーツ1月号, pp 50-51.
- 7) 師岡文男, (1985), フライング・ディスク(フリスビー)～アルティメット(種目名)を中心に～, 大学体育26巻, pp 32-38.
- 8) 師岡文男, (1990), 生涯スポーツとニュースポーツの原点を求めて－, 女子体育第32巻3号, pp 51-55.
- 9) 師岡文男, (1991), 体育実技としてのフライングディスク, 上智大学体育25, pp 41-55.
- 10) 師岡文男, (1995), スポーツ・フォア・オール国際フェア'94, 体育科教育1月号, pp 46-47
- 11) 村瀬智彦, (1998), フライングディスクの大学体育における教材としての特性, 愛知大学体育学論叢第7号, pp 1-9.
- 12) 日本体育協会スポーツ医・科学研究班 (1992), No. VII 中高年者のスポーツ参加に関する社会的・心理学的研究－第1報－, pp 1-71.
- 13) 野々宮徹, (1998), ニュースポーツのあゆみ, みんなのスポーツ12月号, pp 8-12.
- 14) ニュースポーツ研究会(代表)野々宮徹 (1993), ニュースポーツとは何か－そのスポーツ史的考察－, 平成4年度(財)水野スポーツ振興会研究助成金研究成果報告書.
- 15) 大島 寛, (1995), フライングディスクの授業への導入, 体育科教育1月号, pp 42-45.
- 16) 清水良隆、紺野 晃編, (1995), ニュースポーツ百科, 大修館書店.
- 17) 手塚麻美, (1996), 中部大学女子短期大学におけるスポーツ実技の役割－とくにスポーツ実技Aの授業について－, 中部大学女子短期大学紀要・言語文化研究第7号, pp 75-87.
- 18) 山口泰雄, (1995), 地域の活性化とニュースポーツ, 体育科教育1月号, pp 24-27.
- 19) 吉澤洋二編, (1996), 健康と運動・スポーツ入門, 中部日本教育文化社.